

11. 風戸の住民の生活サイクル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉川, 洋平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4906

11. 風戸の住民の生活サイクル

玉川 洋平

- I. はじめに
- II. 漁師、船員の生活サイクル
- III. 漁師、船員を支える女性の生活サイクル
- IV. 高齢者の生活サイクル
- V. 風戸の生活と過疎化

I. はじめに

風戸は日本海に臨む、海岸沿いの漁業地区である。「漁師と船員の町」として有名で、今でこそ減少傾向にあるものの、1970年代までは男の人なら漁師か船員をやっている人が7割近くを占めていた。風戸へ行って話を聞いて自分が最も興味を持ったのは、住民の生活サイクルが自分の知っていた他の地域と大きく違うということである。漁師の1日の生活サイクル、船員の1年の生活サイクル、それを支える女性の生活サイクル、高齢者の生活サイクル、そしてそれらを総括した風戸区全体の生活サイクル。自分の実家がある滋賀の農村と共通したところも多々あるが、やはりそれは漁業集落ならではの特徴を持っている。自分はこういった風戸の生活サイクルを見ていながら、風戸が持つ特性を探り、またそこから風戸の過疎化についても考えていきたいと思う。

II. 漁師、船員の生活サイクル

1. 漁師の生活サイクル

1997年現在、西海地区に漁業従事者は100人ほどで、職業として漁業を行っている人は風戸では約25人。他にも、現在は漁師や船員を引退して、半ば趣味として漁業をやっている高齢者がかなり多い。船によって乗り組む人数は違うが、門前沖、輪島沖など近海で沿岸漁業をしたり、40～50マイルの距離まで沖合漁業に出て、沖で4、5時間漁をしたりしている。漁労長が天気の善し悪しにより船の出航の有無を決めている。

まず、1年の漁のサイクルを見て行くことにする。大別すると、1月～5月はエビかご、6月～12月は巻き網（地元ではきんちゃくと呼ぶ）が行われる。甘エビかご漁の解禁は1月6日～8月25日となっており、1968年ごろまではいつでもよかった。エビかごは毎年新しいものに換え、その数は西海漁協全体で1200個にもなる。新潟から習ってきたもので、最近非常に盛んになり、エビかごで稼げるようになった。エサはニシンの塩づけで、1つのエビかごに平均

20~30匹程入る(少ない時で5、6匹、多い時で100~150匹)。5月を過ぎるとエビは沖に出てとれなくなるので、6月からは巻き網漁が始まる。巻き網漁の1995年の売り上げは約9億円で、これは西海漁協の年間総売り上げの40%以上になり、年間を通して見ても巻き網漁の占める割合は非常に高い。季節的には、秋(8、9月にかけて)の巻き網漁が一番盛んで、サバの他に、イワシ、アジ、ハマチ(ブリ)などがたくさんとれる。この辺りで一番漁獲高があるのはハマチで、四国から運搬船が2、3隻来てハマチを買って行く。ハマチの漁獲は1996、1997年と少ないが、1995年はよくとれた。最近ではイワシが最も多く、1996年の年間漁獲量は西海漁協全体の36%を占める2575トンである。

巻き網漁の盛んな6月~11月の期間は漁協所属の漁船単位で仕事をし、それ以外の時は、エビかご、刺し網、定置網、延縄などを個人でやるという人もいた。定置網漁をするのはだいたい4月~10月いっぱい、ゴミで海が汚れていたり、しけの時は網をあげるようにしている。主にブリ、トビ、イワシなどがとれる。延縄漁業では1~3月にサメ、3、4月にマスがとれ、サメはかまぼこの材料になる。時期によっては一本釣り(イカ、タイなど)や底引き網漁(エビ、カレイなど)も行われている。

次に漁師の1日の生活サイクルに着目すると、まずその労働時間が日によって不規則であることに気づく。漁は昼も夜もあるが、たいていの場合漁に出るのは夕方、朝方に帰ってくる。こういう日は夕方5時ごろ夕食をとって6時ぐらいに出航し、朝の7、8時ごろ帰還する。漁をする時間は日によって違うが、夜中の午前2時~6時くらいになり、その後、魚をさばいて家に帰るのが早朝になる。漁に出る時間帯はその日の天候、魚の動きなどによって変えねばならないが、最近では天気図など様々な情報から綿密に練っている。今でこそテレビ放送があって楽だが、昔はラジオを聞くしかなかった。漁をする時間帯によってその日の生活サイクルも変化してくるわけで、これが漁師という職業の特徴であり、つらいところでもある。漁師にとっては、それこそ1日24時間すべてが仕事が入る可能性のある時間帯であり、1日の生活サイクルというものを一定のパターンに決めることは難しい。それこそ海と魚次第なのである。

また、漁の種類によっても生活サイクルは大きく左右される。イワシ漁は夕方に行われる仕事であるし、巻き網や八双張は夕方から翌朝にかけての仕事である。よって巻き網船に乗る人は、晩に出て行って明け方帰って来ることになり、昼夜逆転生活になってしまう。その上、朝帰ってきてから魚の選別をしたり、さばいたりしなければならないので、一睡もしないでまた出て行く時もある。忙しい時は2、3日で40時間以上働いたり、36時間連続労働などということも過去にはあった。

「漁師に休日はあるのですか」という質問に対しては、「漁師に休みの日なんてないよ。海が荒れて出航できない日が休日になるんだ」という答えが返ってきた。実際のところ、魚が減って漁獲高が減少傾向にあるので、休日をもうけてのんびりとやっていると、仕事にならないら

しい。確実な休みは月に2回ぐらいということで、やはり非常に少ない。その日は丸1日休みになり、市場も漁師も一斉に休みになる。しかし、そんな少ない休日でも毎日の厳しい労働を耐え抜くのは並大抵の苦勞ではない。「そうまでして漁師を続けるのは何故ですか。漁師の魅力って何ですか」という質問に対しては、「捕れるときは、網が揚がらないほど魚が捕れる時がある。あの時の快感が漁のだいご味なんだ」という漁師ならではの一攫千金魂を話して下さった。

しかし最近では、漁も機械化されて楽にはなってきた。巻き網漁も機械化で燃料費はかかるが、昔に比べて労働時間は短い。所得の最低保証や保険により、漁師の待遇も良くなった。だが、よく言われている8時間労働ではないために、漁は時間的に折り合いがつかず、厳しいと言う人も多い。収入や労働時間が決まっている船員に対し、漁師は収入が不安定、労働時間も不規則で、仕事が長引く時が結構あるからである。西海漁協所属の漁船に乗り組む漁師は、1975年ごろまではほとんど地元の人だったが、電話や車の普及で遠くからも出て来られるようになり、今では地区外の人が半分以上になった。最近の若い人は安定した生活サイクルを求める傾向にあり、「漁師でひともうけしてやろう」という昔気質の考え方を持つ人は少なくなっている。家に船があるので仕方なく漁師をやった、という人もいるが、漁師になるのを嫌がって外に出て行く若者も多い。「この地域に関しては、後継者問題はそんなに深刻ではない」という漁協の人の意見もあるが、これからの風戸の漁師不足は決して楽観視できる状況ではないように思えた。

2. 船員の生活サイクル

風戸の中年以上の男の人は、ほとんどが漁師と船員を両方経験している。以前は船員をやっていたが、引退して今は漁師をやっているという人が多い。20年ほど前(1976年)には、風戸の住民で船員をやっている人は40人近くいたが、現在(1997年)は10人くらいである。

船員の生活サイクルを調べる場合、1年単位で仕事のサイクルを見ていく必要があり、長期間働いて長期間休む、というのが船員の特性としてまず挙げられる。目的地によって船に乗っている期間もそれぞれ違ってくるが、外航(日本国外)だと8カ月~1年くらい海上で過ごすこともある。8カ月間海上生活をおくった場合、残りの4カ月は休暇、というふうに休暇の期間も長い。2年ほど帰ってこないのが当たり前、という時期もあったが、今では長くとも1年ほどで帰ってくる。船に乗っている期間が長いと休暇も長くもらえることがあり、航海が1年くらいだと最長6カ月間休むこともある。しかし、これだけ長い休暇がもらえることはまれで、以前に比べ航海に出ている期間が短くなったにもかかわらず、休暇の期間は今も昔も1年に平均1、2カ月くらいである。20年前は、内航(日本国内)でも2年くらいは航海に出たままということもあったのだが、最近は3カ月に1回は家に帰れる。平均すると、3カ月~4カ月くらいで1仕事終わり、1年で帰ってくるのは3、4回、1カ月くらいは家にいるといった感じ

になる。

次にこの長期休暇に注目してみる。最近では労働条件が良くなったので、3、4カ月働けば休暇がもらえるが、20年前なら1年に1回の大事な休暇である。ではこの休暇をどのように過ごすのか。元船員だった人に話を聞いてみた。

「帰ってきたら、まずは寝る。寝ることが先決。2週間くらいしたら体が元にもどる」、「休暇中は、子供と遊んだり船で魚釣りに行ったりした」、「休暇で帰ってきた時も船に乗って漁をしたりする」、「何もせんよ」といった意見があり、船員は1カ月くらいの休暇で帰ってきても、どこか遠くへ遊びに行くというようなことはあまりないらしい。娯楽施設が少ないという理由もあってか、家でのおんびり過ごししたり、休暇中でも趣味と実益を兼ねて、船に乗って漁に出掛けるという人が多い。乗る船、航海先によって休暇の期間も1カ月～3カ月といろいろであるが、仕事があって船の中で正月をむかえた、という話もあり、自分の都合にあわせて休暇がもらえるわけではない。1つの航海が終わっても、日本で積み荷をしてすぐに次の航海に出ていくというような場合もあり、船員の仕事サイクルの厳しさを物語っている。

そうやって1年のうち圧倒的に海上で生活している時間が長いと、風戸区内のことをよく知ることができないで困った、という意見も聞かれる。かつて西海地区の船員の多くは遠洋航路に乗っていて、家に戻るのには年に1、2回、最高1年10カ月連続で働いたというような状況であったから、今以上に風戸の人達とコミュニケーションをとるのは難しかったであろう。当然ながら船員をやっている間は、地区組織に参加したり、役員になったりということはできない。ゆえに船員をやめた人の中には、航海先である外国の様々な土地に関する知識は今でも豊富にあるが、現在自分が生活している風戸のことを知り始めたのはごく最近だ、と苦笑まじりに話す人もいる。

Ⅲ. 漁師、船員を支える女性の生活サイクル

夫が漁師や船員として働いている場合、それを支える女性の役割は大きい。風戸の生活について述べる場合、この女性の果たす役割というのを見過ごすことはできない。その生活サイクルは他の地区の女性と比べて、かなり忙しく、かつ重要なものになっているはずだからである。

1. 漁師を支える女性の生活サイクル

漁から帰ってくる時間や漁をする時間がさまざまなので、漁師の妻は夫の仕事時間に合わせて、生活が不規則にならざるを得ない。しかも漁師は毎日の収入の差が激しく、主婦は家計のやりくりが大変である。内職をしたりパートに出たりする人もいるが、夫の漁の手伝いなどがあって、自分の時間を見つけるのはなかなか難しいようだ。

漁師の妻は主に魚の仕分けなどの手伝いをしなくてはならず、漁協に水揚げされる魚も組合

の女性が選別している。10年くらい前までは乗組員とその家族が魚の選別をしていたのだが、現在選別に来るのは船主の妻くらいである。今の若い女性は魚臭いのは嫌だというし、勤めにも出ているので手伝いにくる人は少なく、人を雇って選別を行っている。特に船持ちの家の主婦は、網の修復や海草の除去などの仕事があり忙しいので、その仕事の手伝いとして、船持ちでない家の主婦を雇ったりもしている。

2. 船員を支える女性の生活サイクル

船員の妻の果たす役割はさらに大きい。船員である夫が航海に出ている間は、女性が主婦であり家長であるからだ。漁師の妻のように、夫の仕事に合わせて生活サイクルが大きく変わるというわけではないが、夫がいない間、残された女性は男の役割もこなさなければならない。老人や子供（最近の子供は特に）の世話を1人でするのは大変である。1人で過ごすのは非常に寂しいし、子育てを全部自分でやるのは並大抵の苦勞ではない。何かあっても夫は船員なのですぐには帰って来られないし、連絡も取りづらい、など船員を支える女性の苦勞はたくさんある。頼る人がおらず、家のことはすべて自分がやらねばならないというのは、精神的にも大きな負担であろう。

船員が多かった時代は、そういった船員の妻同士の助け合いとして、子供を預けたり、預かったりということがよくあった。海友婦人会は船員の妻たちでつくる会である。海友婦人会の目的は船員の妻同士の親睦を深めることにあり、主な活動内容としては、1年に1回のバス旅行などがある。現役の船員の減少によって、風戸区の海友婦人会も会員数が減少し、現在はなくなってしまったが、富来町の海友婦人会が残っている。

確かに苦勞も多いが、「昔、ここの女性は船員に嫁ぐのが一番良かったのではないか」、「船員の妻は漁師の妻より肉体的には楽だ」といった意見もある。船員の妻の良い面として、漁師の妻のような肉体労働がなく、船員は給与もいい、ということが挙げられる。寂しいかわりに生活は保証されている。それに、少し前までは、「船員の妻は畑仕事、漁師の妻は手伝い」といった感じで、女性で賃金労働の仕事をする人はあまりいなかったのだが、最近の若い人は自分の時間を見つけて働いている。女性の主な働き口として、この辺りでは富来のE工業（紳士服など衣類品の会社）などがあり、富来町で140人くらいの女性が働いている。幼い子供がいる世帯では勤めに出られないが、時間がとれる人は正社員、とれない人はパート、というふうに自分なりの生活サイクルをしっかりと作りあげている人も最近は多いように思えた。

IV. 高齢者の生活サイクル

風戸は高齢者の占める割合が高い。夜9時を過ぎると道の明かりはほとんど消え、ひっそりと静まりかえった町は、幽霊でも出てきそうな雰囲気になる。これはやはり、朝起きるのが早

くて夜寝るのも早い、という高齢者ならではの生活サイクルを反映しているからだろう。高齢者の生活サイクルは、風戸全体の生活サイクルを知る上で大きなカギとなる。

60～80歳くらいの高齢者数名に1日の生活サイクルを尋ねたところ、起床は朝6時30分くらいで、午前、午後とも、本を読んだりテレビを見たり、畑仕事をしたりして過ごすということだった。女の人なら、そうじや洗濯の手伝いをしたり、近所に遊びに行つて、同年代同士でお茶を飲みながら話をしたりもする。75歳くらいまでの男の人は、今でもほとんど漁業に関係していて、漁をしたり魚の陸揚げの手伝いなどをしている人が多い。女性でも船主の妻に頼まれて、網から魚をはずすの手伝ったり、エビかご作りや網の修理などをしている人もいる。

また、耕地整理で畑が整備され、ほとんどの高齢者が畑仕事をしている。主に女性だが、漁師や船員を引退して暇ができた男性なども、畑仕事に精をだしている。花を植えたり、自分の家で食べる野菜（ジャガイモ、サツマイモ、指定作物のカボチャ等）を作ったりしていて、取れた野菜を近所におすそわけしたり、親戚に送ったりもしている。畑仕事に出るときは、午前中のあまり暑くない時か夕方に行く。

冬場は畑仕事がないので、漁業関係以外の人ほとんど自由時間になり、楽である。暇なので、近所の友人の家に遊びに行ったりということも、この時期増えてくる。冬は朝起きしてもすることがないので、8時ごろ起きるという意見もあった。逆に夏は、涼しい朝のうちの漁にでたり畑仕事をすませて、日中の暑い時間は昼寝をする。

話を聞いたところ、高齢者の生活サイクルというのはだいたい似かよっていた。畑仕事が1日の生活サイクルの中で重要な位置を占めているようで、畑に行く以外で外に出ることは、普段はあまりない。畑仕事以外では、寺にお参りに行つて、僧侶の説教を聞いたりすることがある。高齢者は結構よくお参りに行く。また、グランドゴルフも盛んで、これを楽しみにしている男の人は風戸に多く、年齢層も広い。グランドゴルフはだいたい午後（夏は3時～6時過ぎまで、冬は1時～4時過ぎまで）にやるため、午前中は畑仕事など自分の用事をする。他にも、健康クラブや老人会、新しく開かれた民謡教室など社会参加の場は多く、高齢者間のつながりは強い。健康クラブに来るのは、家で野菜などを作っている女性の高齢者の人達で、家に主婦がいたり、機械化で漁業の手伝いをしなくてもよくなった、生活サイクルに余裕ができた人達である。

高齢者がみんな元気で、不満もほとんどないことから、風戸は高齢者にとって住み良い町と言える。それは風戸の生活サイクルが高齢者の生活サイクルに適したものになっているからであり、高齢者の占める比率が高いことから、これは当然かもしれない。しかし裏を返せば、風戸の生活サイクルは若者の生活サイクルには合っていない、ということになる。見たところ、高齢者の生活サイクルに合わせた施設、集まりは多い。一人暮らしとて不自由することはそんなにないだろう。だが、当然ながら若者が遊べるような施設はない。外に出ていた若者が休暇

をもらって風戸へ帰ってきてても、彼らはすることがなくて困ってしまうのではないだろうか。

V. 風戸の生活と過疎化

風戸の朝は早い。毎朝6時になると各家に起床の音楽が流される。昔はサイレンが鳴らされていた。風戸の夜も早い。昔は夜になると道に明かり一つなくなったので、カンテラを持って歩くこともあった。風戸で調査をしている時、自分は夜道のあまりの暗さに驚いたわけだが、田舎の実家に帰ってみると、夜9時を過ぎれば同じように暗い。どこが違ったのかと言うと、風戸では車の音がまったくなく、非常に静かだったのである。地形的に車道が作りにくいということもあってか、道は狭く、夜になると車の往来は少ない。しかし、車を持っている人が他の地域と比べて少ないというわけではなく、むしろ遠方へ買い物に行くために、車の所有率は非常に高い。バスも通っているが、これを利用するのは免許を持っていない高齢者の人くらいで、病院に行く時など、ごくたまに利用する程度である。「バス停じゃなくても、頼めば家の前で降ろしてくれるんだよ」という話もあった。

風戸は、海に面していることを除けば、自分の実家のある農村地区と雰囲気がよく似ている。高齢者の生活サイクルに若い人が合わせづらい、というのも同じで、よくわかる。しかし比べてみると、若い人はやはり風戸の方が圧倒的に少ない。この原因はどこにあるのか。漁師や船員の生活サイクルが厳しいことは前述したとおりだが、それにも関係して、風戸の若者が地元に残らない、残りたい理由があるはずである。

交通の便が悪い、店がない、病院が遠いなど、過疎化を促す要因はいろいろある。だが、風戸から若者が減っていく最も大きな要因は、やはり就職口がないからだというのが住民の共通の意見である。高校までは家から通えるとしても、高校を出てから働くところがない。漁業はその年ごとに漁獲高や魚の値段が違い、収入が不安定なので、今の若い人はよりつかなくなっている。よって、若い人は高校卒業後、必ずといっていいくらい風戸から出て行く。遠方の大学へ行き、風戸へ戻らずに就職する人が多い。残るのは、たまたま役場職員などの就職口があった人くらいである。大学進学後、教員になってUターン就職する人もいるが、大学卒業後に帰ってくるのは、教員以外では役場か銀行に就職した人くらいだそうだ。女性が結婚して戻ってくるということもなく、若い人は金沢などに就職して、週末に帰ってくるという形態をとる。このように、風戸だけでなく西海地区や西浦地区の若い人は、残りたい気持ちはあっても、仕事や勤めの関係で出ていかざるを得ない。志賀の工業団地に住みこむ人などもいるが、たいいてい人は遠方で就職する。

若い人が外へ出て行く影響で、世帯数は変わらないが人口は減っている。最近では高校生でも一人暮らしをする人が多くなり、1997年現在、平均世帯員数は3.5人だが、2人家族が多く、老夫婦だけの家もたくさんある。非常に寂しい。だいたいの子供は結婚後、風戸を離れ別の地で

生活するので、若夫婦と老夫婦の2世代で暮らすという世帯はごく少ない。小学生や保育園児も少なく、風戸区では現在小学生は20人足らず、来年の小学校入学者も1人か2人という話である。

だが、こういった過疎化を嘆く声が多い中、「風戸や風無はまだ若い人がいるほうだ」、「西海地区は漁業という産業があるため、富来の中では若い人が多い方だろう」といった、風戸はそれほど過疎ではないという意見もある。データの的にも、極端な世帯数の減少は見られず、戦後あたりから世帯数100戸くらいというのは変わっていない。意外だったのは漁協である。1日の生活サイクルが非常にハードで、話を聞きにいった日もほとんど徹夜状態で、前日の夜11時から10時間働きっぱなしということなのに、ここで働く人達は若い(23~40歳くらい)人が半分以上なのである。ハードだから若い人が多いという考え方もできるが、就労者年齢が高い風戸では、いささか驚きだった。ほとんどの人が出身は西海地区で、「これだけ若い人が多い漁協は少ないのではないか」と職員の人も話していた。

「後継者探しに困っている」、「最近の人手不足はしょうがない」と嘆く漁師が多い中、「人手不足は確かだが、支障がでるほどでもない。もう少し人が多い方が良いのだが、今のままでもなんとかやっていける」という漁協職員の強気な意見は印象的だった。「仕事のサイクルが厳しいから若い漁師は減る。ゆえに高齢化が進み、漁業中心の風戸は過疎化する」と単純に決めつけることはできない。気合の入った漁師はまだまだ風戸にも西海地区にもたくさんいる。「風戸の生活サイクルは高齢者の生活サイクル」と記したが、それ以上に、今日でも「風戸の生活サイクルは漁師の生活サイクル」なのである。漁業は風戸の生活に密着しており、風戸で生活する人達と、漁業を切り離して考えることはできない。春夏秋冬、1年の漁のサイクルが風戸の住民の生活サイクルの中にしっかりと組み込まれているからである。事実、漁業にたずさわっていない人でも、漁に関する知識はほとんどの人が持っている。思うに、恐らく数は減っても、漁師がいなくなるということはないだろう。漁業は風戸の生命線。風戸の過疎化が進むか否かは、これからの漁業技術の発展と強気な漁師気質にかかっていると思われる。